

報告2 シリーズ現場訪問② 「ランネットグローバルスクール プロジェクト発表」

■訪問日:2008年6月21日(土) ■リポーター:cozy

梅雨空の中、六甲山に登りました。

第2回ビジョンハウスのスピーカーとしてご登場いただいたことが記憶に新しい、炭谷俊樹さんが主宰されているランネットグローバルスクール。「Oplysning=自分を照らし、相手を照らし、お互いに成長する」を基本理念にフリースクールとして1996年から活動を開始しています。「教育の問題という、お上しか解決出来ないと思っている人が多い。しかし、そうではない。私たち一人ひとりが、自分たちの問題として解決できる問題である。」と、語って下さった炭谷さん。まさに、大海の一滴の生き字引といえます。そんなランネットグローバルスクールの理念を象徴するようなプログラムである、「プロジェクト学習」の発表会が開催される、との情報を聞きつけ、お邪魔cozyが急遽発表会の様子をオブザーブさせていただきました。

問題解決能力を身につける事が目的のプロジェクト学習の時間

「岡本わくわくハウス」から、マイクロバスに乗って六甲山標高約850mの「六甲山のびのびロッジ」まで炭谷さんの運転で向かいます。炭谷さんの計らいで、今年入学されたばかりの1年生の保護者の方々と車中お話をさせていただくことができました。ちなみに、「岡本わくわくハウス」から「六甲山のびのびロッジ」までは、ゆっくり走れば約30分。生徒さんは毎日「岡本わくわくハウス」に集合して、マイクロバスで「六甲山のびのびロッジ」に向かいます。道中は、「美しい」日本語の話をテープで聞いたり、英語の話を聞いたり、音楽を聞いたりしているそうです。



いつも生徒さんが乗っているマイクロバス

今回発表会が行われた「プロジェクト学習」とは個人またはグループで、自分が日ごろから気になっていること、興味があることについて「調べる」「まとめる」「発表する」プロセスを体験することで、問題解決のプロセスを身につけるカリキュラムです。時間割は、1週間に1回(40分×1コマ)、または2回(40分×2コマ)。発表会では、その学期中調べた事を集大成として発表します。

～車中でお伺いしたランネットの凄さ！～

今年の1年生は全部で3名。保護者の方5名と同乗させていただきました。

バンピーナから通っている生徒さんは、さすが、自分の強みをこれ以上なく伸ばしているようで、とにかく友達作りが趣味の様子。公園でもどこでも、すぐに自分から話しかけて友達を作ってしまうそう。しかも、アプローチも複数で、断られても絶対にあきらめず、結局お友達になってしまうとか。お父様も「うちの会社の連中にコミュニケーションのレクチャーしてほしいものだ」と、びっくりするくらい社交性を磨いています。

インターネットでモンテッソーリ検索をされてランネットにたどり着いたお母様は、御自身がバリバリのエリート教育を受けてきた方。特に意識をしたわけではないものの、教育に関しての知識を幅広くおもちだったことから、一選択肢としてモンテッソーリ教育を考え、体験入学をしたところ、お子様が主体的にランネットを選んだことから入学を決めたそうです。

知り合い2人から同時にランネットを紹介をされた、というお母様は、過去、名門お受験幼稚園に通っていた経験がある方。ところが、過酷な発表会の練習を機に、お子様が通園をしるようになり、頭を痛めていたとのこと。そんな時、導かれるようにランネットに出会い、やはりお子様がランネットをとて気に入り入学を決意されたそうです。

どの方にも共通して言えることは、「子供が選んだ」というスタンスを持っている事でした。自分の子供が選んだことだから、親はそれを勇気をもって支援する。信頼関係がしっかりと生まれている親子を見た気がしました。

●六甲山のびのびロッジ到着～発表会

約30分走って、大分標高も上がってきたところで、さらに山道に入りこみ、六甲山のびのびロッジに到着。すでに、中は発表会の準備が整えられており、私たち一行の到着を待つばかりとなっております。

クラス別発表

●「ミルクイスター」小学校1～2年生 今回の発表の目玉は「段ボールハウス」

部屋の1/3を覆うくらい大きな段ボールハウスは、ミルクイスターのみなさんが毎日コツコツ作り上げたものとか。完成してからは、この家の中でご飯を食べたり、喧嘩したりしたそうです。思い出いっぱい、思い出いっぱいの家をミルクイスターのみなさんが演劇を通して一生懸命紹介してくれます。

そして、そのあとはミルクイスターメンバーそれぞれの「宝物」の発表と他己紹介。「〇〇ちゃんのすごいところは絵がとても上手なところです。しかも、友達の誕生日に誕生日カードを作ってくれます」など。必ず良いところを紹介し合います。クラス全体の発表だからといって、個が消えないような発表スタイルを貫いているところが



<これが段ボールハウス！>



<灯もつきます>



<電話もあります>



<表札ももちろん凝っています>

素晴らしいです。そして、ナビゲータの方の進行がまた凄い。「型」を目指した発表ではないので、きわめて自由な進行であり、予期せぬ出来事が多発します。それをしっかりと受け止めて、全体をさりげなくひっぱる。瞬発力と判断力が素晴らしいです。しなやか、という言葉がぴったりくるファシリテーションでした。発表後は段ボールハウスの見学会。力作段ボールハウスでありましたが、お昼後にはサクッと撤収されておりました。

●「ミルクイスター」小学校1～2年生 今回の発表テーマは「春の自然」

ロッジのまわりで春を感じるために、実際にたくさん食べて歩き回ったそう。あれは旨かった、あれはまずかった、と、体(胃袋)で感じる春の自然。発表は、ヨモギ団子の作り方やつくしの佃煮の作り方など。「ハカマを取らず煮てしまうとまずくなる」と、しっかり仮説検証しています。こちらの発表もとてもインタラクティブ。保護者の方に突っ込まれたりしながら、ワイワイ、真剣に発表しています。

そう、発表の時間は全員が当事者。発表する方も、聞いている方も真剣です。だから、反応がものすごくいいです。質問も沢山出ます。



<ABAという会社の社長が船にのって段ボールハウスにたどり着くという設定の演劇>



<真剣に発表中>

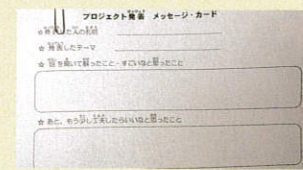
発表会1日のメニュー

- 1: クラス別発表
- 2: 個人発表 前半
- 3: クラス別発表
- 4: 音楽発表(うた & 合奏)
- 5: 個人発表 後半

個人発表

● 個人プロジェクトの発表の特徴は3つです。

- 1) 完全に個人責任でファシリテートするプレゼンテーション形式
- 2) 必ず質問を受け付ける
- 3) コメントカードによるフィードバック



<コメントカード>



<みなさんの発表アジェンダ>

プロジェクト学習のテーマはすべて自分で見つけさせるのがルールです。初年度はなかなかテーマが見つけれず苦戦するお子さんも、もちろん居るとか。ところが、一回発表を経験すると、お子さんの意識は大きく変わるそうです。日常生活の中でテーマを見つけようと意識が大きく変わるのだそうです。自分でも「そこまで夢中になれないテーマを選んでしまったな」とか、「テーマを決めるのに時間がわかりすぎて、発表までの準備が足りなかったな」と反省するわけです。すると、自然に「よし！次こそ思いっきり研究できるテーマを選ぼう！」「早くテーマを決めて準備の時間をたっぷりとうらう！」と思うようになり、日ごろから自分の問題意識に対して敏感になるようになります。

炭谷さんもおっしゃっていましたが、問題発見の力は本人の意識がすべてであると。どんなに、課題解決の思考力が備わっていたとしても、そもそもの問題発見力がなければ、その力は発揮できません。「問題意識をもって日常を切り取る」ことを学ぶことで、自分の人生をデザインする力を学んでいるのです。

発表スタイルもすべて個人のアイデアに任せられます。どの作品を実際にプレゼンテーション資料として使うか、模造紙にどんな風にまとめるのか。話のシナリオをどう構成するのか。すべてが委ねられます。ケーキやブレッツェルというテーマでは、実際に作ったお菓子がふるまわれました。100m糸電話が通じるか！の実験を発表の途中で行ったり、発表の途中で外に出てクイズを開始するという斬新なアイデアも！



<cozy個人的に大感動の人体図>



<100m糸電話は通じるのか！大人がおおはしゃぎ。「ちょっと静かにして」と子供たちから怒られました>

うた

ランネットでは、音楽をとて大切にしています。うまい、下手ではなく、自分を表現するツールとして。そして身体感覚を磨くために。歌いながらずっと踊っていたり、恥ずかしそうだったり、じっと観客を見詰めていたり、生徒さんによって様子もさまざまです。けれど、皆が自分なりに音楽というツールを使って自分を

まとめ

大人が定義した「うまさ」を押しつけることは簡単です。基準を作り、成果を明確にする。けれど、ランネットは一切基準を押し付けません。ですから、それは、見る人から見たら「ゆるい」発表になるかもしれません。けれども、いわゆる「うまい」発表を見たときに、いつも私たちは何を口にするでしょうか。「すごいね」とか「よく頑張ったわね」とか「よくできた」などではないでしょうか。

ランネットの発表を1日見ていて、私はものすごくいろいろなことを感じました。人間という生き物について、思考しました。

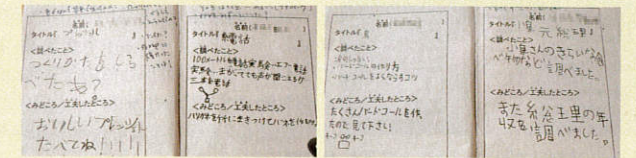


<まさに子供たちの作品はアートアート！！>



● テーマは本当にさまざま。全員のテーマを紹介します。

- ・鳥 ・石けん ・ブレッツェル ・小泉元総理 ・エジソン ・お礼
- ・血 ・糸電話 ・ケーキづくり ・FMラジオ ・ロッジのまわりの植物



<とある植物を探せ！>



<高学年になるとパワーポイントを使って発表>



<聞く方も真剣勝負！力が入ります>



<質問が次から次へと>

お互いの発表のスタイルから刺激を受けて、次の発表のアイデアにつなげていくのです。このプロセスからは、過去の事例から学び、仮説検証する力を養う事ができます。

発表後の質問に関しても、とにかく「なぜ？」「なぜ？」の質問が多いのが印象的です。発表内容に対しての質問よりも「なぜ、あなたはこのテーマをえらんだのか？」「なぜ、この作品を作ったのか？」本人に対する質問が多い事が印象的でした。そして、どの生徒さんも自分の力で必ず質問に答えます。小さい頃から質問をする、される、ということになれるということがいかに重要か、つくづく感じます。

質問というと、アラを探したり、相手に挑むものという意識があったりしますが、質問は「相手を知りたいという気持ちを表す手段なんだ」という当たり前のことに改めて気付かされます。



<真剣にコメントカードに記入する保護者の方々>

しっかりと表現、把握していました。保護者の方も一緒になって歌います。何気にcozyも張り切って歌っておりました。



<広いロッジ一杯に響く歌声>

「この子は、今こういう気持なのかな」「この子は、こういう価値観をもっているんだな」「この子は、こうしたいんじゃないかな」

そして、そこに自分というものを投影し、さらに深く思考が進みます。その状態は、私がアートを共有している時間ととても似ていました。作家の作品から、ものすごく多くのことを考える時間。私はアートを共有するということは「考える」ことだと思っています。

ですから、ランネットの発表会はずでにアートであった、と、つくづく感じています。伝わる、ということは、受け手であるこちら側が多くの事を思考するという事ではないでしょうか。